

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：12401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720231

研究課題名(和文) 格体制の交替現象に関する日英語の対照研究 - 動詞の意味の階層性に着目した分析 -

研究課題名(英文) A Contrastive Study of the Locative Alternations in Japanese and English: A Hierarchical Model of Semantic Types of Verbs

研究代表者

川野 靖子 (KAWANO, Yasuko)

埼玉大学・教養学部・准教授

研究者番号：00364159

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円、(間接経費) 240,000円

研究成果の概要(和文)：日英語に見られる「壁にペンキを塗る/壁をペンキで塗る」「spray paint onto the wall / spray the wall with paint」のような交替現象の成立原理を考察した。

この現象は、同じ現実の出来事が言語の上で位置変化(の下位タイプ)と状態変化(の下位タイプ)の二通りに類型化されることで成立する現象であり、動詞の範疇的意味に「格体制を決定する階層>交替の可否を決定する階層>交替パターンを決定する階層」を想定することで説明できる。日英語の現象は同じ成立原理を持つ一方で交替動詞のリストに一部相違を持つが、この相違は個々の動詞の語彙的意味の面から説明できる。

研究成果の概要(英文)：The locative alternation is a phenomenon in which a certain class of verbs causes an alternation in syntactic frames. This study discussed the mechanism of the Japanese and English locative alternations.

The locative alternation in both languages arises as a result of a semantic type shift, in which the same objective event is linguistically conceptualized either as a subtype of a change of location or a subtype of a change of state, and can be accounted for by assuming three hierarchically ordered levels in semantic types of verbs: a level determining the syntactic frame of a verb, a lower level determining whether a verb undergoes alternation, and a much lower level determining the allowable pattern of the alternation. Although the Japanese and English locative alternations arise by the same mechanism, the lists of alternating verbs slightly differ between the two languages. This difference can be accounted for by the semantic characteristics of each verb.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：格体制の交替現象 壁塗り代換 locative alternation 動詞

1. 研究開始当初の背景

以下の例が示すように、「塗る」や「巻く」等の動詞は～ニ～ヲという格体制と～ヲ～デという格体制の交替を起こす。

壁にペンキを塗る
壁をペンキで塗る

腕に包帯を巻く
腕を包帯で巻く

この現象は、「壁塗り代換」(あるいは場所格交替、等)と呼ばれている。

一方で、このような交替を起こさず、片方の格体制しかとらない動詞もある。たとえば「付ける」という動詞は、

壁にペンキを付ける
*壁をペンキで付ける

のように、～ニ～ヲ形にしか現れず、また「汚す」のような動詞は

壁をペンキで汚す
*壁にペンキを汚す

のように、～ヲ～デ形にしか現れない。

以上のことから、壁塗り代換の研究においては、交替はどのような条件の下、どのような仕組みで起こるのか、ということが研究課題となる。

ところで、上でみた日本語の現象と同じ現象が英語でも観察される (locative alternation と呼ばれている)。たとえば以下の例が示すように、動詞 spray や load は日本語の～ニ～ヲ形に対応する統語フレーム [NP V NP spatial PP] と、～ヲ～デ形に対応する統語フレーム [NP V NP with NP] の交替を起こす。

He sprayed paint onto the wall.
He sprayed the wall with paint.

He loaded hay on the wagon.
He loaded the wagon with hay.

また、全ての動詞がこのような交替を起こすわけではなく、片方の統語フレームにしか現れない動詞も存在するという点も、日本語の壁塗り代換と共通する。たとえば put という動詞は、

He put the books on the desk.
*He put the desk with the books.

のように [NP V NP spatial PP] の統語フレームにしか現れず、fill は、

He filled the glass with water.

*He filled water into the glass.

のように、[NP V NP with NP] の統語フレームにしか現れない。

つまり、英語でも、交替がどのような条件の下、どのような仕組みで起こるのかということが問題となるのである。

この問題は英語学でも日本語学でも取り上げられ、日英語を対照する研究もなされている。しかしその多くは英語研究から出発しているため、日本語の用例の観察に不十分な点が見られ、また理論の構築においても日本語学の知見が十分には反映されていない。

一方、筆者は、平成20年度～22年度科学研究費補助金研究において、日本語において格体制の交替が起こる仕組みを考察した。しかし、英語の現象にも同様の議論が当てはまるかどうかや、英語学の分野で提案されている諸理論との詳しい比較検討は行っていない。

2. 研究の目的

以上のことを背景として、本研究は、日英語に見られる格体制の交替現象が、どのような仕組みで生じるのかを考察する。具体的には、下記の点を分析することで、交替の成立原理に関して日英語でどこまでが共通し、何が異なるのかを明らかにする。

- (1) 理論的研究の基盤となる、現象の記述。
- (2) 筆者が日本語の現象をもとに構築した理論の、英語への適用可能性の検討。
- (3) 英語学で提案されている諸理論との比較検討。

3. 研究の方法

本研究の、方法上の特色をまとめると、次のようになる。

- (1) 交替を起こす動詞群だけでなく、交替を起こさない動詞群にも着目し、両者の意味特徴を比較するという方法を徹底する。これにより、交替を起こす動詞の条件を予測可能な形で記述することができる。
- (2) コーパスを使用した広範囲な用例調査を行い、「その動詞の、交替の起こしやすさの度合い」を把握する。これにより、典型的な交替動詞や典型的な非交替動詞だけでなく、その境界線上にある動詞の振る舞いもデータとして組み込むことができる。
- (3) 日本語学でも英語学でも、従来は「壁にペンキを塗る / 壁をペンキで塗る」や He sprayed paint onto the wall / He sprayed the wall with paint のような壁塗り代換 (locative alternation) の研究が中心であった。本研究でもこの交替

を主に扱うが、これと関連する他の交替現象(「桜の葉に餅をくるむ/餅を桜の葉でくるむ」のような日本語の「餅くるみ交替」や、He sheathed the television in a coverlet / He sheathed the television with a coverlet のような英語の *in/with* alternation)も考察範囲に含める。これにより、理論の適用範囲を広げ、有効性を高める。

- (4) 筆者が平成 20 年度～22 年度科学研究費補助金研究において日本語の現象をもとに構築した理論(動詞の意味の階層性に着目したアプローチ)がどの程度英語の現象にも適用可能であるかを検討する。またその際、筆者の理論を、英語学の分野で提案されている諸理論と比較検討することで、精緻化を図り、妥当性と有効性を高める。

4. 研究成果

本研究で得られた結論をまとめると、次のようになる。

- (1) 日英語において格体制の交替現象が起こる仕組みについて

日本語の壁塗り代換と英語の locative alternation には、次のような共通点がある。

交替関係にある二つの文は一見、同じ意味を表すように見えるが、実際には異なる意味を表している。既に先行研究でも指摘されているように、日本語の～ニ～ヲ形が表すのは位置変化、～ヲ～デ形が表すのは状態変化であり、また英語の[NP V NP spatial PP]と[NP V NP with NP]も、それぞれ位置変化(change of location)と状態変化(change of state)を表している。つまり、壁塗り代換も locative alternation も、位置変化の意味と結びついた統語フレームと状態変化の意味と結びついた統語フレームの間の交替現象であるという点で共通する。

しかし、全ての位置変化動詞や状態変化動詞が交替を起こすわけではない。同じ位置変化を表す動詞であっても「(～ニ～ヲ)塗る」のように～ヲ～デ形との交替を起こす動詞もあれば、「(～ニ～ヲ)付ける」のように～ヲ～デ形との交替を起こさない動詞もある。また同じ状態変化動詞であっても「(～ヲ～デ)塗る」のように～ニ～ヲ形との交替を起こす動詞もあれば、「(～ヲ～デ)汚す」のように～ニ～ヲ形との交替を起こさない動詞もある。このことは英語の場合も同様である。

日本語の壁塗り代換も英語の locative alternation も、動詞の形態的な派生を伴うことなく生じる。たとえば「壁にペンキを塗る」の「塗る」も「壁をペンキで塗る」の「塗る」も、同じ「塗る」という語形であり、派生関係を示す形態的なマーカーは付加されない。英語においても、たとえば He sprayed paint onto the wall の spray と He sprayed the wall with paint の spray は同じ語形であり、一方が基本形で他方が派生形であることを示すような形態的なマーカーは付加されない。

日本語の～ニ～ヲ形と～ヲ～デ形の交替には、実は壁塗り代換とは異なるパターンの交替(餅くるみ交替)が存在する(川野 1997, 2004, 2006, 2009 等)。これと並行的に、英語の[NP V NP spatial PP]フレームと[NP V NP with NP]フレームの交替にも、locative alternation だけでなく、日本語の餅くるみ交替に相当する、もう一つの交替(*in/with* alternation)が存在する(岩田 2001, Iwata 2008 等)。

以上の～から、日英語の交替現象は、共に次のような原理で成立すると考えられる。

まず、上記より、壁塗り代換と locative alternation は、ある外界の出来事が、言語の上で位置変化と状態変化の二通りに概念化されることで成立する現象であると考えられることができる。

ただし、上記の点を踏まえると、このような概念間のシフトは、全ての位置変化と全ての状態変化の間で起こるわけではなく、位置変化の下位タイプと状態変化の下位タイプの間で起こると考えるべきである。つまり、位置変化や状態変化という範疇の意味がその動詞の格体制(統語フレーム)の決定に関わるのに対し、その動詞が交替を起こすかどうかは、「位置変化」や「状態変化」よりも下位のレベルの範疇の意味によって決定されると考えられる。

また、上記より、交替の可否を決定する意味階層のさらに下に、交替パターンを決定する階層があることが分かる。

以上を整理すると、日英語の交替現象の成立原理は、動詞の範疇の意味に、「格体制(統語フレーム)を決定する階層>交替の可否を決定する階層>交替のパターンを決定する階層」の三つの階層を考えることで説明できることになる。このことは、川野(2009)で提案した理論が、日本語だけでなく英語の交替現象にも当てはまることを示している。

なお、上記は、日本語でも英語でも、交替関係(シフト関係)にある位置変化(の下位タイプ)と状態変化(の下位タイプ)が、

一方が基本的意味で他方が派生的意味であるというような関係にあるのではなく、同じ外界の出来事の二通りの解釈として対等な立場にあることを示している。ここから、派生関係を想定せずに交替を説明する川野(2009)の理論は、英語に対しても妥当であるといえる。

(2) 日英語で相違点を生じる要因

上記(1)で述べたように、日英語の交替現象は同じ原理で成立していると考えられる。また、日本語の「塗る」と英語の smear が共に交替を起こし、日本語の「付ける」「置く」と英語の put がいずれも交替を起こさないように、日英語で同じような意味を表す動詞が同じ振る舞いを見せることから、交替動詞の条件は日英語でかなりの程度共通していると考えられる。

しかし一方で、交替の可否に関する動詞の振る舞いは、日英語で完全に一致しているわけではない。用例調査を進めた結果、似たような意味を表す動詞であっても、英語では交替を起こす(あるいは起こさない)のに対し日本語では交替の可否が揺れるというケースがあることが明らかになった。たとえば英語の pack や stuff に対応する日本語の「詰める」や、cover に対応する「覆う」がそうであり、これらの動詞が交替を起こすかどうかについては、先行研究の間でも見解が分かっている。そこで、これらの動詞の振る舞いを改めてコーパスで調査した上で、これらの動詞において交替の可否が揺れる理由を考察した。その結果、「詰める」の場合は、「塗る」のような典型的な交替動詞に見られる「形状適応」の意味の度合いが弱いことが交替を起こしにくくしており、また「覆う」の場合は、「覆う」の有する、出来事に参与する二つの事物の大小関係に関する語彙的指定が交替を難しくしていることが分かった。

以上のことから、日英語の交替現象が同じ原理で成立しているにもかかわらず、交替動詞のリストに一部相違を生じる要因は、個々の動詞の語彙的指定の有無やその度合いの相違に求められるという示唆が得られた。

(3) 他の諸理論との比較検討

上記(1)で述べた、交替の成立原理に関する本研究の議論を、英語学の分野で提案されている諸理論と比較検討し、次の三つの点で本研究の理論が有効であることを確認した。

まず、従来の多くの研究における交替の成立原理の説明は、「ある動詞が統語フレーム A と統語フレーム B の交替を起こすのは、その動詞が、統語フレーム A と結びつく a という意味と、統語フレーム B と結びつく b という意味の両方を有している(あるいは両方の意味と適合する)ためである」というものである。しかしこれは、「その動詞が二種類の統語フレームをとる(すなわち交替を起こす)」という現象を意味の面から言い換えたもの

にすぎず、予測力を持たない。これに対し、統語フレームと結びつく意味ではなく、それよりも下位のレベルの範疇の意味に着目して交替を起こす動詞と起こさない動詞の違いを記述する本稿のアプローチでは、循環論に陥ることなく、交替の可否を予測できることになる。

次に、統語フレームを決定する意味よりも下位の意味階層を想定しない他の理論では、同じ交替動詞でも動詞によって交替のパターンが異なることを説明できないが、本研究の理論では、この点も説明できる。

最後に本研究の理論では、英語学の一部の理論(たとえば Pinker1989)とは異なり、交替関係にある二用法間に派生関係を想定せずに交替を説明するが、このことは、形態と意味の並行性を自然な形で捉えられるという点で有効性を持つ。

引用文献

- 岩田彩志(2001)「構文理論の展開」『英語青年』147-9、研究社
- 川野靖子(1997)「位置変化動詞と状態変化動詞の接点—いわゆる「壁塗り代換」を中心に—」『筑波日本語研究』2
- 川野靖子(2004)「桜の葉に餅をくるむ」と「餅を桜の葉でくるむ」—壁塗り代換との関連性—」『香椎潟』50、福岡女子大学国文学会
- 川野靖子(2006)「現代日本語における位置変化構文と状態変化構文の交替現象—格成分の対応の仕方—」『日本語の研究』2-1、日本語学会
- 川野靖子(2009)「壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞—交替の可否を決定する意味階層の存在—」『日本語の研究』5-4、日本語学会
- Iwata, Seiji.(2008) *Locative Alternation: A Lexical-Constructional Approach*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia.
- Pinker, Steven. (1989) *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*, MIT Press, Cambridge.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

1. 川野靖子(2013)「現代日本語の動詞「詰める」「覆う」の分析 格体制の交替の観点から」『埼玉大学紀要(教養学部)』査読無、48巻2号、pp.33-43
<http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=KY-AA12017560-4802-03>

2. 川野靖子(2012)「壁塗り代換を起こす動詞の特徴 現代日本語の自動詞を中心に」『香椎潟』査読無、第56・57合併号、福岡

女子大学国文学会、pp.(左)1-14

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川野靖子 (KAWANO Yasuko)

埼玉大学・教養学部・准教授

研究者番号：00364159

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：